【研究ノート】

モンゴル語母語話者を対象とする日本語音声教育の諸問題

城生佰太郎

Some problems on Japanese, from point of view of Mongolian native speakers

JÔO, Hakutarô

キーワード：モンゴル語　音声教育　母音調和　アクセント　対照音声学

0. はじめに

日本語教育における音声教育では、原則として日本語を知らない外国人に日本語の音声を教えることを第1の目的とする。したがって、日本語を母語とする人たちに教える場合との決定的な違いは、学習者の母語における音の体系が大きな障壁として立ちはだかっているということである。このことは、別言すれば、母語が異なればそれに応じたきめ細かな教授方法が検討されなければならないということを意味する[1]。

ところで、これまでにアジア圏では、中国語と韓国語母語話者を対象とする研究は数多く行われてきたが、タイ語、ベトナム語、フィリピン語、インドネシア語、マレーシア語などとなるとその数は激減し、さらに統語構造が日本語と酷似することで知られるトルコ語やモンゴル語などになると、その数はほとんど無きに等しい状況にある。そこで、本稿ではたまたま筆者がアルタイ言語学と関わってきたという学問的背景がある[2]ところ

から、モンゴル語母語話者を対象とする日本語音声教育にはどのような問題点があるのかを明らかにすることを目的とする。

１. 母音調和

モンゴル語を考える際に、まず第 1 に挙げなければならない音的特徴は母音調和の存在である。母音調和とは、

同一形態論的単位内における母音音素の配列に関する制限

と定義できる。具体例を挙げると、たとえばモンゴル語では ama ならば OK だが ame ではだめ、ということである。もちろん、日本語ならば ama は「尼、海女」などとして、また ame は「雨、天、飴」などとして実在するので問題などあろうはずもないが、モンゴル語では母音が体系的に

男性母音　a,o,u
女性母音　e,o’,u’
中性母音　i

のようにカテゴリー化されており[3]、同一単語内では原則として男性母音と女性母音を混ぜて用いることができないのである。ただし、中性母音は男女どちらとも共存できる。したがって、

ama,amo,amu,ima,imo,imu…

などは可能な組み合わせだが、

ame,amo’,amu’,ema,emo,emu…

などは不可能な組み合わせであるということになる。したがって、実際にモンゴル語母語話者が日本語を学習する際には、「尼、海女」などはやさしく感じるが「雨、天、飴」などだと難しく感じるということになる[4]。このようなことは、モンゴル語を知らない日本語教師には想像もつかないことであろう。

ちなみに、私の名前である「じょうお・はくたろう」も、モンゴル語的に発音すると [ジャーア・ハカタラー] とか [ジェーエ・ヘケテレー] でないとルールにかなわぬこととなり、これは私にとってはかなり悲惨な有様である。そのわけは、ローマ字表記で示せばわかりやすくなるが、男性母音でそろえると JAA hakataraa とか JOO hokotoroo などとなり、また女性母音でそろえれば JEE heketeree とか JO'O' ho'ko'to'ro'o'…などとなるからにほかならない。

なお、脳波を用いた聴覚実験音声学的所見でも、城生佰太郎（2005:307-319）によれば大脳における聴覚情報処理系の営みにおけるレベルで、すでに上に述べた母音調和が截然と区別されている様子が見て取れる。

2. 母音に関する諸問題

母音は、音声分析においては基本中の基本である。したがって、まずはここから問題点を検討することとする。そこで、本稿の目的に照らし、はじめに全体を鳥瞰するために、音韻論的側面から日本語とモンゴル語の母音体系を対照する[5]ことによって、問題点を焦点化することにしよう。

モンゴル語の母音体系のあらましは、すでに前節 1 で述べたとおりだが、さらに 3 点を加えてもう少し詳しく述べておく。第 1 は、音節量（母音音素の量的種類）の問題であり、全部で 3 種を数える。具体例示をしておけば、

（a）短母音音素（bogino egsjig）: a,e,o,o',u,u',i

（b）長母音音素（urt egsjig）:aa,ee,oo,o'o',uu,u'u',ii

（c）二重母音音素（xos egsjig）:ai,ei,oi,o'i,ui,u'i,ia,ie,io,io',iu,iu'

などとなる。なお、音声学的には二重母音音素はしばしば長母音化して調音される。たとえば、「良く、良い」などを意味する /sain/ における二重母音 /ai/ は、実際には [sɛːn] のように長母音として調音される、といった具合である。

第 2 は、弱母音の存在が厄介な事態を招いているという問題である。たとえば、17 世紀の中頃に成立したとされるモンゴルの歴史年代記『アルタン・トプチ』などでは、「黒、黒い」は /xara/ であった。しかし、その後音変化が起こり、第 2 音節の /a/ は極端に弱化してしまい、現在の諸方言の中には完全に聞こえないほどに衰退してしまったという例もある。また、ロシアに隣接するモンゴル国では、中国領内の内モンゴル自治区とは異なり、キリル字に 2 文字を追加して強引に成立させた「新文字正書法」を用いており、このルールによれば原則として弱母音は表記しないこととしている。このため、前述の /xara/ は＜xap＞ /xar/ と表記されている。このような正書法の態度にも、弱母音をさらに衰退させてしまった要因があるものと思われる。

ところで、上に述べた弱母音の成立と、はじめに述べた母音調和の存在とは、一見無関係のように見えるかもしれないが、両者には通底するところがある。すなわち、母音調和というルールは、同一形態論的単位内では 1 番目に出てきた母音の属性が、それ以降に出現する母音音素の属性を支配するといったものであった。同様にして、弱化母音の成立も、同一形態論的単位内で 1 番目に出てきた母音音素は明瞭に調音されるが、第 2 音節以下はそれだけのパワーを持続することができずに弱化したということにほかならない。そこで、この 2 つの現象に共通する要素を指摘すれば、それははじめに出た要素が強い統率力を持って、後続する諸要素を呑み込んでしまうということである。これを別の表現に置き換えれば、syntagmatic な統率力が強いタイプの言語現象であるということになる[6]。なお、このことは、後述するアクセントとも密接に関わる。

最後に、第 3 として、モンゴル語にはいわゆる「オ系母音」に 3 種類の

類似した母音音素があるという問題である。つまり、日本語母語話者にはほとんど区別がつかないような「オ系列の母音」が 3 種類もあるということである。具体例示をすれば、

/tos/　油
/to’s/　類似
/tus/　利益

という類の対立である。このことは、日本語母語話者がモンゴル語を学習する際にももちろん大きな障壁となるが、この逆にモンゴル語母語話者が日本語を習得する際にも、われわれ日本人が思いもよらない問題を引き起こすこととなる。

たとえば、日本語（東京方言）では音韻論的に「オ系 母音」は1種類の/オ/しか存在しない。しかし、音声学的にはいろいろな異音が用いられている。そのひとつに、遠くの人に向かって叫ぶときの「オーイ！」が挙げられる。生理学的な合理性から、私たちはこのようなケースでは通常の「オ母音」よりもやや開口度を上げ、舌位置を後方にスライドさせて調音する習慣がある。これを、国際音声記号（IPA）で書けば[ɔː]となる。ところが、これこそがモンゴル語の/o/にほかならないのだ。したがって、モンゴル語母語話者がこの母音を聞けば、ほぼ100%の確率で/オ/とは異なる音素が日本語にも存在するのではないかと誤解をしてしまうことになる。いわゆる母語の体系が及ぼす負の転移ということである。

ちなみに、日本語では上に述べたように音韻論的にはただ１種類の/オ/しか存在しないため、異音の拡散範囲が広くなっている。一方、モンゴル語では、類似したオ系母音に 3 種類の音韻論的対立を有する音素がひしめき合っているため、異音の広がりが極度に狭く取られている。この結果、モンゴル語母語話者はオ系母音に対しては判定基準がシビアで、わずかな違いでも異なる音素として聴取理解する習慣があるのに対し、日本語母語

話者は「オ系母音」にはかなり大らかな判定基準を適用しているということになる。

３．子音に関する諸問題

まず、総括的な印象だが、日本語母語話者がはじめてモンゴル語を聞くと、やたらと「コショコショ、クシュクシュ」と言う感じで子音だけが耳の底にこびりついている。したがって、筆者はかつてこの特徴を捉えてモンゴル語を「子音優位言語」と呼んだことがある。また、その後呼気流量計を用いて生理実験を行ったり[7]、sound spectrograph を用いて音響実験を行った[8]りした結果、日本語と比べると調音強度の点でモンゴル語のほうが勝っているということを明らかにしている。さらに、平成 25 年度文教大学大学院における筆者担当の実験音声学演習でも、音韻の切り詰め実験を行った際にモンゴル語母語話者は /za/ の頭部子音をわずかに削っただけでも /da/ と知覚したのに対し、日本語母語話者はかなり切除しないと /da/ とは知覚できなかったといった事例もある。つまり、日本語母語話者に比べてそれだけ子音の認知の仕方がシビアであるということにほかならない。

この結果、モンゴル語母語話者が日本語の子音を調音すると、総じて明瞭で強すぎる傾向があり、この点で日本語母語話者は違和感を覚える。筆者などは、モンゴル人は日本語を話す際にそんなに力まなくても良いと思うのだが､これこそは生まれてからずっと身につけてきた言語習慣なので、一朝一夕には直せない。音韻論だけに注目していると見逃してしまう問題だけに、音声学的観点からの緻密な観察も不可欠であるという事例として指摘しておきたい。

次に、日本語とモンゴル語の子音音素の体系を対照しながら、細かい点について述べることとする。

表１　子音音素の対照[9]

日本語子音体系			
p	t	c	k
b	d	z	g
s	h		
m	n		
w	r	j	

モンゴル語子音体系			
(p)	t	c	(k)
b	d		g
(f)	s	z	x
m	n		ŋ
w	r	l	j

（　）内は、外来語などで用いられる周辺的な音素を示す。

3.1. 有声音と無声音

日本語にもモンゴル語にも、音韻論的に見て有声音と無声音との対立はある。しかし、モンゴル語の子音は前述したように総じて大変に強いため、日本語の子音と比べるとすべてにおいてかなり異なった性質を持っている。その中でも、特に有声音と無声音との対立を有する日本語の /p, t, c, k, b, d, z, g, s/ と、モンゴル語の /(p), t , (k) , b , d , g, (f) , s, z, x/ の違いは大きい。

まず、日本語の無声破裂子音 /p, t, k/ は、語頭と限られた環境では音声学的に帯気音をともなって調音されることが知られているが、いずれも極めて弱く、モンゴル語の / (p), t, (k) / とは比べ物にならない。一般的に見て、無声音と有声音が対立的価値を有する言語では、相対的に無声音のほうが有声音よりも強い。このため、日本語の無声子音程度の強さでは、モンゴル語母語話者の耳には有声音としてしか認識されないことも多く、「届く」を「ドドク」、「ただし」を「ダダシ」のように言い間違える場合がある。

ちなみに、ロシア語では日本の「横浜」を「YOKOGAMA」と発音しているが、筆者はこれも同じ理由によるものだと考えている。つまり、ロシア語における無声子音も日本語よりもはるかに強いため、日本語では無声音として調音されている「ハ」が、ロシア人の耳にはせいぜい有声音の「GA」にしか聞こえなかったのではないかということである。

3.2. 子音調和

モンゴル語では、第１節に述べたように母音調和がある。言語学や音声学では、一般に分節音を母音と子音に２分することになっているが、よくよく考えてみると母音と子音との境界線は多くの場合不明瞭である。母音の尾部が後続子音の頭部と重なり合い、そのまた子音の尾部が後続母音の頭部と重なり合う…といった構造で言語音が具現化しているからにほかならない。

また、このような線状構造上の問題以外にも、たとえば [m][n][l][j][w]…などのように音響そのものの性質が母音と似たようなフォルマントを有するなど、一筋縄では行かない複雑な様相を呈している。特に、音声学的には接近音（approximant）に分類される [j][w] などの類を、母音の [i][u] と差別化することに古来より諸家が苦労をしてきたことは、あまねく人々の知るところであろう[10]。したがって、母音と子音に２分するというのは、あくまでも分析する際の方法論上の便法に過ぎないのだということを、まずは認識しておく必要がある。

このため、母音の特性だと思い込んでいた現象が、実は隣接する子音にも同様に及んでいるということも、言語音の世界では決して珍しいことではない。国際的に良く知られている事実としては、現代ドイツ語における「イッヒ・ラウト」と「アッハ・ラウト」の区別がある。つまり、Ich を調音すると先行する母音の舌位置が前舌なので、後続する無声摩擦子音の調音位置もこれに引きずられて前方にシフトするため、IPA で表記すれば [ç] という硬口蓋音となる。いっぽう、Ach を調音すると先行する母音の舌位置が後舌なので、後続する無声摩擦子音の調音位置もこれに引きずられて後方にシフトするため、IPA で表記すれば [x] という軟口蓋音となる。

実は、これと同じことがモンゴル語やトルコ語にも観察される。モンゴル語で例示すると、

（1a）ax [ɑχ]　兄　　（1b）эx [eх]　母

（2a）rap [Gɑr]　手　　（2b）rəp [ger]　家

などとなる。すなわち、(1a)や(2a)では先行する母音の舌位置が後舌なので、後続する子音の調音位置もこれに引きずられて後方にシフトするため、IPAで表記すれば [χ],[G] という口蓋垂音となる。いっぽう、（1b）や（2b）の場合は先行する母音の舌位置が前舌なので、後続する子音の調音位置もこれに引きずられて前方にシフトするため、IPA で表記すれば [x],[g] という軟口蓋音となる。

以上の現象を、アルタイ言語学では「子音調和 consonant harmony」と呼んでいる。ただし、前述した母音調和との決定的な相違点は、母音調和が音韻論的レベルの現象であったのに対し、こちらの子音調和は音声同化現象を捉えた音声学的レベルの問題であるという点である。

このように、モンゴル語母語話者は母音の調音位置や開口度、口唇形状などの調節に関してきわめて鋭敏に反応するだけでなく、それに隣接する子音の音声的差異に関しても鋭く反応してしまうということを、特に日本語を教える立場の人たちは認識しておく必要がある。具体的に述べると、たとえばハ行音の「ハ、ヘ、ホ」[11] と、カ行音、ガ行音の場合にモンゴル語母語話者は無意識のうちに子音調和が働いてしまうため、

ハ、ホ = [χ]　　ヘ = [x]

ガ、ゴ、グ = [G]　　ギ、ゲ = [g]

カ、コ、ク = [q]　　キ、ケ = [k]

のように、異なる子音として捉えてしまうことが多い。このようなことは、モンゴル語を知らない日本人の教師にとっては、まったくもって想定外の現象であろう。

日本語の中から、以上に述べた音声同化現象を探し出すことはやや困難

だが、「これしか」を「コレッキャ」、「意外」を「イギャイ」のように調音するような場合がこれに該当する。すなわち、前者では「シ」という音節に含まれる前舌母音 [i] の影響を受けて、後続する軟口蓋に調音位置を有する [kɑ] が前進化して硬口蓋に近づいた結果 [kja] となったものであり、後者においては後続する「イ」の影響を受けて、本来は軟口蓋に調音位置を有する [gɑ] が前進化して硬口蓋に近づいた結果 [gja] となったものである。

3.3. ラ行音

日本語におけるラ行の子音が特殊であることは、いろいろな音声学書で再三指摘されてきたとおりだが、モンゴル語母語話者にとっても厄介な対象である。まず、本節の冒頭に掲げた日本語とモンゴル語の子音体系の対照表からも明らかなように、日本語ではいわゆる流音系の子音音素としてはラ行音 1 種類しかないのに対し、モンゴル語では流音系に /r/,/l/ の 2 種類の音素が実在するという点である。たとえば、

/gar/　「手、腕」
/gal/　「火」

というように /r/,/l/ は音韻論的に対立する。しかも、それぞれの音声学的実現形が /r/= 歯茎ふるえ音 [r] であるのに対し、/l/= 後部歯茎の側面摩擦音 [ɮ] であるため、いずれも日本語のラ行音である歯茎はじき音の [ɾ] とは一致しない。とは言うものの、日本語のラ行音はどちらかと言えばモンゴル語の /r/ のほうに近いので、モンゴル語母語話者は [r] で調音することが多い。しかし、前述したようにモンゴル語の子音は総じて強く調音されるため、日本語母語話者が聞くとかなり勢いの良いふるえ音に聞こえるので違和感を覚える。

母音と子音に関する諸問題は、以上に述べたとおりだが、最後にあえて

一言付け加えておく。それは、外国語学習以前に、母語を理論的に捉えておくことがきわめて重要であるということである。具体的に述べれば、まずは母語で無意識に使ってきた母音調和や子音調和について、その原理を良く知ることである。そうすることによって、学習対象をよりよく理解することができ、結果として学習効率の向上へとつながるのである。

４．アクセントに関する諸問題

モンゴル語のアクセントは、機能の点から分類すれば非示差的な bound accent である。また、アクセント類型から見れば強さアクセントに分類される。

まず、機能面で非示差的な bound accent であるということは、日本語に見られるような「朝」と「麻」、「箸」「端」「橋」などのように、アクセントのみの違いによる対立例が存在しないからである。さらに、伝統的なモンゴル語学では、語のアクセントは常に第 1 音節にあって固定化されていると説かれてきた。上に言う bound accent（拘束アクセント）というのは、まさにそのような性質を捉えた術語である。

次に、アクセント類型からの分類で強さアクセント（stress）であるというのは、この言語には顕著な弱母音が存在するからである。金田一春彦（1965）以来の研究で、弱母音があればいわゆる「主従関係」が成立するので強さアクセントと判定することができるとされているからにほかならない。モンゴル語では、上に述べたように語のアクセントは常に第 1 音節にあるとされている。したがって、第 2 音節以下の母音は当然のことだが弱化する。ただし、すでに第 2 節に述べておいた母音音素の量的種類（音節量）がここで問題になる。すなわち、語が短母音のみで構成されている場合は、上記の通り第 1 音節だけが自動的にアクセントをにない、第 2 音節以下にはアクセントは落ちない。しかし、長母音や二重母音が含まれていると、アクセントは初出の長母音や二重母音に落ちる、という制約がある。つまり、2 音節語で初頭に短母音があり、第 2 音節に長母音が来る /agaar/

のような語では、アクセントは第 2 音節の /gaar/ に落ちるということである。

以上が、従来モンゴル語学で説かれてきたアクセントのあらましだが、筆者の観察するところでは、モンゴル語のアクセントはそれほど単純ではない。まず第 1 に指摘しておきたいことは、音韻論的側面からは非示差的であり、したがって「音韻論的に無意味なアクセント」というレッテルを貼られてきた言語のアクセントといえども、音声学的側面から捕捉すれば必ず一定の社会習慣的型が実在するということである。つまり、音韻論的な対立がないのだから、どのように調音しても良いなどということはありえないということである。

言語学者は、対立的価値のない言語のアクセントには興味を示さないが、音声学者はそこに社会習慣的に一定した再現性が見られる限り、そのような現象に対しては大いなる興味を示す。つまり、言語学は理論に重きを置き、音声学は現象そのものに重きを置くという、学問の根本姿勢の違いがあるからにほかならない。以上に述べたことを簡潔にまとめておくと、

(1) アクセント現象に迫り得る方法論には 2 種類ある
(2) 第 1 は、言語学に属する音韻論的アクセントによる分析方法
(3) 第 2 は、音声学に属する音声学的アクセント[12] による分析方法

である、ということになる。さらにつけ加えておくと、上記の (2) には対立的価値を持たないがゆえに「音韻論的に無意味なアクセント」などというものが含まれるが、(3) は世界中のあらゆる言語に実在するものであり、したがって、「音声学的に無意味なアクセント」などというものは存在しない。

4.1. 高さと強さ

音声学的観点からアクセントを捉えると、音響音声学的側面からは

（1）高さ =pitch

（2）強さ =stress

（3）長さ =length（duration）

（4）音質 =quality

の4点がチェックポイントとなる。しかしながら、モンゴル語では(3)と(4)はいずれも(1)と(2)に包含される要素たり得るので、本稿では(1)と(2)からモンゴル語の音声学的アクセントの特徴を指摘しておく。

4.1.1. 単音節短母音

現代モンゴル語では、音声学的側面から捉えた場合、単音節はすべて長母音として調音されるので、単音節短母音は音声学的には存在しない。

4.1.2. 単音節長母音・重母音

正書法では＜Би＞（私）と書くが、音声のほうは長母音で [ˈbiː] と調音される。すなわち、高さは高下降（High falling=HF）であり、強さもこの位置にかかる。なお、重母音の場合も同様であるが、すでに第2節でも述べたように、たとえば二重母音として表記されている＜сайн＞は、話し言葉では多くの場合 [ˈsɛːn] のように長母音として調音される傾向にある。

したがって、以上の特徴から、モンゴル語母語話者にとって日本語の単音節語

ka 蚊、ki 木、su 巣、te 手、no 野…

などを短く、しかも平らなアクセントで調音することは非常に難しい。

4.1.3.　2音節短母音

従来の説では、本節冒頭に述べたように、例外なく第1音節が強いとされてきた。無論、高さの情報は全く顧慮されていない。しかしながら、音響音声学的方法を用いてつぶさに観察すると、結果はそれほど単純ではない。

まず、モンゴル語で2音節語に現れ得る高さと強さに関するすべてのパタンを示すと、表1のようになる。なお、□は短母音のみで構成される音節を、■は長母音・二重母音で構成される音節をそれぞれ抽象化して示したものである。また、モンゴル語では音声学的に■における平ら音調が実在しないので、表中にはその組み合わせを示していない。

表1　音節の種類とアクセント

1. □□	1a	'H　L	3. ■□	3a	'hl　L
	1b	H　'L		3b	hl　'L
	1c	'L　H		3c	'lh　H
	1d	L　'H		3d	lh　'H
2. □■	2a	'H　hl	4. ■■	4a	'hl　L
	2b	H　'hl		4b	hl　'L
	2c	'L　hl		4c	'lh　hl
	2d	L　'hl		4d	lh　'hl

上表では、キャピタルのH,Lは平ら音調、スモールのhl,lhはそれぞれ下降音調と上昇音調を示す。なお、「'」はstressを示す。

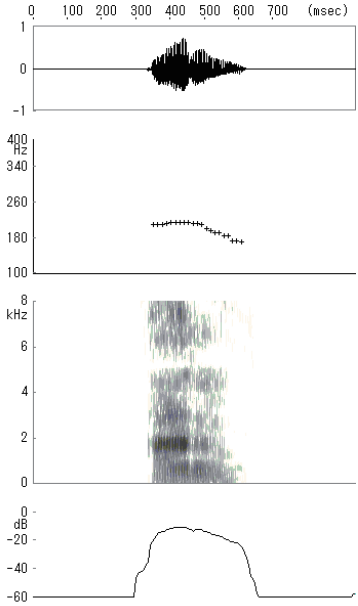
この表から、アクセントパタンを巨視的に捉えると、モンゴル語のアクセントはまず、(1)高く始まるか、(2)低く始まるか、で2分され、そのそれぞれがさらに(3)強いか、(4)弱いか、で2分されると捉えると、単純化できる。すなわち、音節構造の違いを除外してアクセントパタンそのものだけを抽出すれば1a, 2a, 3a, 4aは同じ類型として分類することができ、同様にして1b, 2b, 3b, 4b ～ 1d, 2d, 3d, 4dも一まとめにすることができる。そこで、新にもう1段単純化した体系を表2に示す。なお、アミ掛けの音節は音声学的な強さを示す。また、1音節めと2音節めでは必ずアクセントパ

タンが異なる。すなわち、HH,LL などのように同じ高さや、強強、弱弱のように同じ強さの連続は実在しないということである。

表２　実在するアクセントパタン

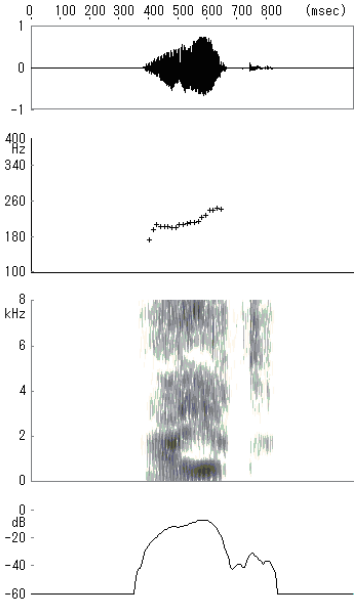
アクセントパタン		実例
a.	H L	arab, airag
b.	H L	--------
c.	L H	zurgaa
d.	L H	ajak, baruung

次に、上に示したアクセントパタンの一部を、音響音声学的方法によって検証してみる。図 1 は、/arab/ (10) という語を音響分析したものだが、表 2a に該当する例となる。



[ａｒａｂ]
図１　/arab/

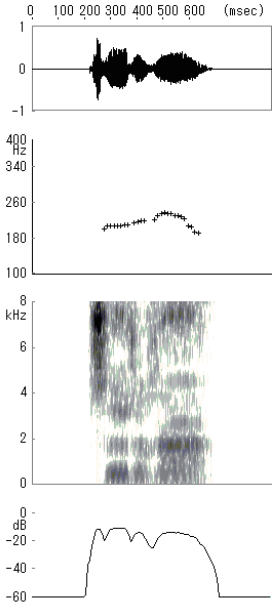
図は、上段から(1)原波形、(2) pitch (高さ)、(3) SPG (スペクトログラム)、(4) intensity (音圧)をそれぞれ示したものだが、このタイプの語では伝統的な学説の通り第 1 音節が強くて高いことが確認される[13]。なお、図の底部の [ ] に入れた音声記号は、ほぼ上の音響データと対応させてある。したがって、この語のアクセントは第 1 音節にあると判断して良い。しかし、モンゴル語の短母音のみで構成されている語がすべてこのようなアクセントを示しているわけではない。



[a ja　k]
図２ /ajak/

図 2 は、/ajak/（お椀）を分析したものだが、このタイプの語では高さも音圧も第 2 音節のほうが勝っているので、表 2d の例となる。

4.1.4. ２音節長母音・重母音

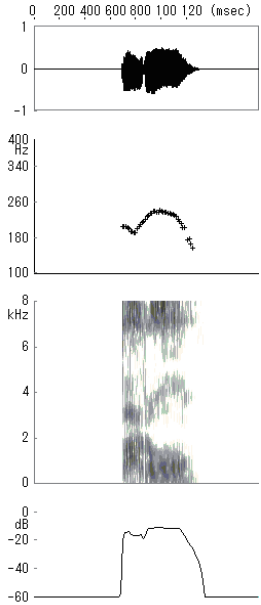


[ʤo r ɢɑː]
図３ /zurgaa/

図から明らかなように、高さは第 2 音節の長母音に来ている。しかし、音圧は第 1 音節にある。したがって、これは表 2c のタイプのアクセントであるということになる。なお、城生佰太郎 (2001:102-105) では、このように高さは担っているが強さを担っていない音節の母音を「中強母音」と命名し、注目している。ちなみに、このタイプでは第 2 音節はほとんどが短母音であり、このデータのように長母音や重母音が来る例は稀である。

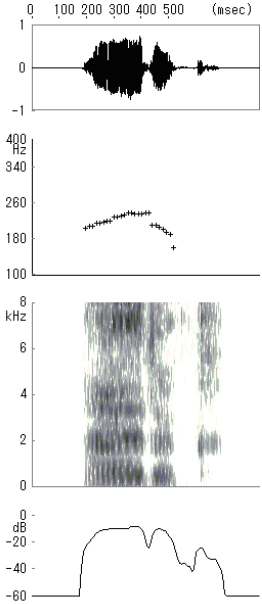
次に、同じく第 1 音節が短母音で、第 2 音節に長母音や重母音が来る /baruung/（右、西）を分析した結果を図 4 に示す。上に見た図 3 の場合とは異なり、今度は高さも強さも第 2 音節にある。したがって、これは表 2d のタイプのアクセントであるということになる。なお、第 2 音節が長母音や重母音である場合は、このデータのように高さも強さも第 2 音節に

来ることが圧倒的に多い。



[ba ro:ŋ]
図４ /baruung/

次に、上の逆パタンで、第 1 音節が長母音や重母音で、第 2 音節に短母音が来る例を示す。図 5 は、/airag/ を分析したものだが、結果として第 1 音節が強くて高いことがわかる。すなわち、このタイプは表 2a に属すことになるので伝統的な学説に合致する例となる。



[aę̌ rak]
図５ /airag/

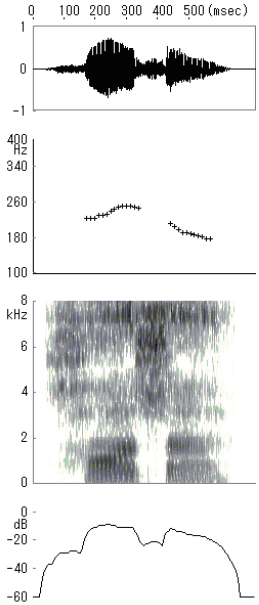
最後に、第 1 音節も第 2 音節もともに長母音や重母音である例として、/xooloi/ を図 6 に示す。結果として、高さも強さも第 1 音節にあるので、このタイプのアクセントも表 4a に属すことがわかる。

以上の結果から明らかなように、音韻論的には非示差的なアクセントであるモンゴル語の場合でも、音声学的レベルでは表 2b のように実在しないアクセントパタンがあるということが、ものの見事に実証できるのである。このことは、音声学的観点からはもとより、言語学的観点からもきわめて重要な意義を有する。なぜならば、従来、多くの言語学者たちはモンゴル語のアクセントを捉えて、

> 音韻論的観点からは、非示差的であり常に語の第 1 音節に stress が落ちると記述できる。しかし、音韻論的な対立がないのだから音声

学的には強さや高さなどの配置はかなり自由であり、このため、強さや高さに関しては安定した一定のパタンは存在しない

などと短絡的に考えていたからにほかならない。しかし、言語事実というものは多くの場合、言語学者の想定をはるかに超えた複雑なものである[14]。したがって、この事実を理論家たちは肝に銘じてしっかりと記憶しておくべきである。また、このような音声学的制約が存在するからこそ、「○○語らしさ」という聴覚認知が可能なのである。



[　χ ɔː　ɮ ɔʲ　]
図６　/xooloi/

以上の事例が明示しているように、いやしくも自然言語という具体的な対象を扱うからには、ある意味では愚直なまでに現象そのものと対峙するという姿勢こそが、科学の基本であると筆者は固く信じている[15]。

なお、3 音節以上になると、モンゴル語では活用ならびに曲用語尾や接

辞を伴うことが多くなり、さらに複合語の頻度も高くなるので、本稿では省略する。

4.2. 日本語学習への影響

モンゴル語母語話者は、一般に以上で明らかにした特徴を持っているため、日本語のアクセントを習得する際に幾つかの困難な問題を抱えることになる。

第 1 は、なんといっても非示差的なアクセントを母語としているために、示差的である日本語のアクセントの重さが十分に理解しきれないという点である。したがって、学習する際には「朝」と「麻」、「雨」と「飴」、「箸」「橋」「端」などのような最小対立例の弁別を重点的に訓練することが必要である。

第 2 に、母語であるモンゴル語にもすでに指摘したように、音声学的レベルからはしっかりとした高さと強さに関するアクセント・パタンが備わっている、という事実の確認と利用である。つまり、「朝」のアクセントを学習する際には /arab/ などを思い浮かべることが、また「麻」の学習には /ajak/ などを思い浮かべることが効果的であるということにほかならない。また、日本語における平板型アクセントである「端」などを学習する際には、表 2c に属す /zurgaa/ などのタイプの語を思い浮かべると、近似音として効果的である。

初級のモンゴル語母語話者が調音する日本語のアクセントを観察すると、一見、ソウルに代表される韓国語母語話者に近いような印象を受けるが、なおも注意深く観察すると韓国語母語話者よりはいくぶん上手にアクセントの弁別ができていることに気づくことが多い。この理由も、上に述べたとおり音声学的レベルに備わっている母語のアクセントが影響したものであることが窺知される。

5. 結語

以上、本稿では日本では余り扱われることのないモンゴル語母語話者の視点に立って、日本語音声教育における分節音（母音と子音）ならびにプロソディーの一部をなすアクセントについて、現時点で考えられる問題点を指摘した。

日本語教育を専門としている人たちの間では、学習者の母語別に何パタンかの教材を作りこれをきめ細かく教授するということは、限られた時間しか得られない現場のことを考えると、現実的に不可能であるとの甚だ消極的な意見が目立つ。しかし、上に明らかにしたように、たとえば音声教育の場合では、学習者の母語を顧慮することなしに機械的に音韻論に寄りかかって抽象化した音声の skeleton（骸骨）だけを教授することがいかに不毛であるかは、だれの目にも明らかなことであろう。

ついでのことに、関連深い事例をつけ加えておく。城生佰太郎(2007)は、脳波を用いた聴覚実験音声学的方法を用いた結果、モーラの認知の仕方が日本語・中国語・韓国語の母語話者ごとに異なっていることを示唆している。実験がまだ試論的段階にあって観察件数が少ないことと、研究対象がモーラ性の認知にあることから本稿の目的と完全に合致するものではないが、日本語の音声の捉え方が大脳における聴覚情報処理のレベルでは母語話者別にかなり異なっているという事実の指摘には、十分な根拠が示せるものと考える。

したがって、今後は従来の悪しき慣習を廃棄して、日本語非母語話者の視線に立ったきめ細かな教授法の開発にも、専門家の諸氏が立ち上がってくださることを期待する。また、その際に必要不可欠な方法論は、対照音声学(contrastive phonetics)ということになる。現在のところ、音声学の研究分野の中では比較的等閑視されている領域だけに、ことの重要性に気づき、日本語教育を専門とする一人でも多くの研究者が、対照音声学的研究に目覚めてくださることを祈念してやまない。

【注】

1 ちなみに、文法や語彙に関しても、筆者は類型論的観点から母語話者別に教育方法を検討すべきであると考えている。
2 筆者は、東京外国語大学モンゴル語学科および同大学院アジア第一言語専修コースでモンゴル語学を専攻し、その後筑波大学人文社会科学研究科において博士課程の「言語学特講アルタイ言語学」をおよそ 30 年間にわたって講じてきた。
3 母音は、すべて音素記号で表記してある。なお、印刷の都合により、今回は後舌円唇半広母音を o、対応の女性母音を o’、後舌円唇半狭母音を u、対応の女性母音を u’、でそれぞれ表記する。いずれも、従来モンゴル語を扱った拙論とは異なる表記とした点を、お断りしておく。
4 モンゴル語母語話者であるレントヤー（現在東京学芸大学所属の研究員）、シリンゴア（本学大学院言語文化研究科に在学中）さんたちも、同様の感想を述べている。
5 最近は、無節操に「比較」という術語が用いられるようになったが、伝統的な一般言語学的観点からの術語の用い方としては、比較言語学的検証の結果互いに同系であることが明らかとされた諸言語間にのみ、「比較」という術語を用いるのが正しい。したがって、ここの脈絡では「比較」ではなく「対照」とすべきであることを、あえて断っておく。
6 文法論ならば統語論的（syntactic）なレベルの現象であると表現できるが、ことが音韻現象なので「統語論」というのには抵抗があるため、このような表現をとった。
7 城生佰太郎（2005）の第 3 章などを参照。
8 城生佰太郎（*ibid.*）の第 2 章などを参照。
9 この表は、いわゆる分節音だけを示したものなので、モーラ音素に属する /R, N, Q/ は外してある。
10 de Saussure の sonante と consonante の別や、Chomsky&Halle の sonorant、その他、伝統的な半母音（半子音）といった分類方法など。
11 ちなみに、ヒは硬口蓋音の [ç]、フは両唇音の [ɸ] なので、問題にはならない。
12 音声学的アクセントと音韻論的アクセントの違いについては、城生佰太郎（2008）、城生佰太郎（2012）などを参照。
13 解析ソフトは杉スピーチ・アナライザー、音源はサンプリングレート 44.1kHz、量子化 16 ビットのモノーラルである。また、解析用の音源は城生佰太郎･チメッツェレン・アマルゾル（2007）付属 CD による。
14 フランスの言語学者 A.Martinet（アンドレ・マルティネ）も、Martinet（1962）で異口同音の指摘をしている。
15 氷河期の発見者として知られる、海洋学、地質学、古生物学を専門とした科学者ルイ・アガシーも、“Study nature, not books” という名言を残している。

【参照文献】

金田一春彦（1965）「高さのアクセントはアクセントにあらず」『言語研究』第 48 号、日本言語学会、（『日本語音韻の研究』、東京堂出版、1967 に「音韻論的単位の考」と改題して再録）

城生佰太郎（2001）『アルタイ語対照研究――なぞなぞに見られる韻律節の構造――』、（平成 12 年度日本学術振興会科学研究費補助金による助成出版）、勉誠出版

城生佰太郎（2005）『モンゴル語母音調和の研究――実験音声学的接近――』、（平成 16 年度日本学術振興会科学研究費補助金による助成出版）、勉誠出版

城生佰太郎（2007）「モーラの正体再考――ERP を用いた実験音声学的研究――」、『文藝言語研究　言語篇』第 52 号：23-36. 筑波大学大学院人文社会科学研究科　文芸・言語専攻

城生佰太郎・チメッツェレン・アマルゾル（2007）『今すぐ使えるモンゴル語入門』、勉誠出版

城生佰太郎（2008）『一般音声学講義』、勉誠出版

城生佰太郎（2012）「音声学的アクセントと音韻論的アクセント」、『文教大学国文』第 41 号：12-21. 文教大学国文学会

Martinet,A.（1962）: *A Functional View of Language*.（Clarendon Press,Oxford. 田中春美訳『言語機能論』みすず書房、1975）